

■日本の外国人コミュニティ■

## 江戸川のインド人ITエンジニア

星野裕子

[ほしの ゆうこ]

■IT企業勤務

夕 闇に沈む東京・西葛西を歩いていると、ほのかに光るものが目の端に映った。見ると、それは道の反対側を歩いている婦人がまとった蛍光の黄緑色をしたサリーだった。

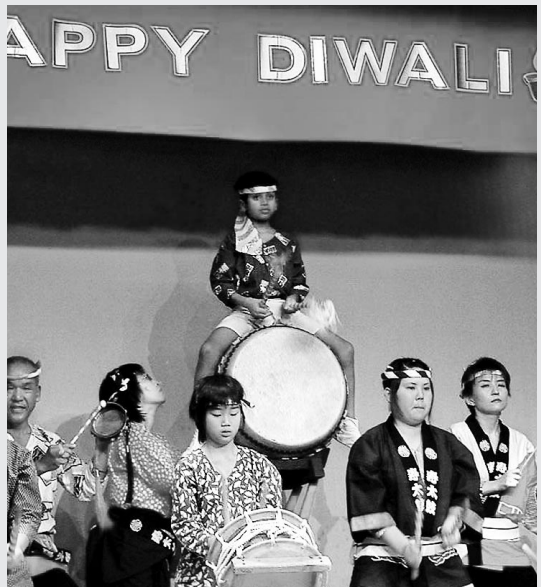
江戸川区はインド人が多い街だ。都心から近いにもかかわらず比較的家賃が安いという理由で住み始めたインド人がインド人と呼ばれ、ここ数年はIT（情報技術）エンジニアが続々と来日するに従ってその数は劇的に増え、いまや600人を超えるようになった。江戸川区でも特に葛西地区に多く、日曜日にはベビーカーを押しながら買い物をしているインド人の若夫婦をよく目にする。

子連れが多い彼らは、かねてより教育の問題で悩んでいた。日本の学校に子どもを入れるには言葉の壁がある。インターナショナルスクールは費用が高いうえに、欧米の文化に沿って教育される。祖国の文化を教えてくれる安価な学校があれば、というのが親たちの願いだった。その声に応えるようにして2004年8月、江東区森下にインド・インターナショナルスクールができた。現在、都内から平均4～5歳の子ども約40人が通い、インドから取り寄せた教科書で授業を受けている。

「インド人のための学校ができて、ほっとしている」と語るのは江戸川インド人会会長夫人のペーラー・チャンドラーニーさん。次なる願いはヒンドゥー寺院を造ることだという。「心の安らぐ場であるお寺が欲しいということもあるし、インド人コミュニティの集会所もほしいのです」。

チャンドラーニーさんは24年前から西葛西に住み、インド人の間で和紙漉（す）き体験教室や国内小旅行を企画したりしている。インド人が増える経緯をつぶさに見てきた彼女は、西葛西がリトル・インディアになってしまうことには反対だという。

「リトル・インディアができると、外部とあまり接しなくても生活ができてしまうでしょう。買い物にしても、日本人が行くスーパーに行って日本人から『インド人もこれを食べるんだ』と親しみを抱いてもらうことが大事。だから生活場所を分けたりせずに、お互い見えるところで生活するのが一番。せっかく日本に来たのだから、日本の文化を体験し、良さを発見したほうがいい」。



インドの祭「ディーワリー」をインド人と日本人との和太鼓合奏で祝う（東京・江戸川区で）  
撮影：筆者

ほしの ゆうこ 東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語専攻卒。2002～03年日本・パキスタン国交50周年に際しパキスタンの3都市でウルドゥー語劇を公演（役者として出演）